忠史
実録 いろは文庫 七編下

へ遠13
1807
21

昭和文庫

昭和文庫
807
21

いろは文庫巻之廿一

江戸　爲永春水著

第四十一回

（這回い第六編の上の巻と引合せて見べし）偖もお民い兼松が疑ひの引揚さ出会て義士の楽ふ捺抱ろき大高子義の艶冊と一色ニこの今我貴ひーゞお民い我ゐを雅とい知らも接多れ涙を捉ふる人ゞさらひ沙ーと関しらも狂気のごく狂ひ流て我ゐを貴ひーと支ゆ仏者その知らざらーゞ

ゆかりて隠し置く紙関べ淫茶屋七浪人づる野の鼓へ対
ひ入て本嘉紙遣る引揚と性ふ拍子の知恵ーふ情い
良吏湖平太どのもそうちふ主ーるん鼓を対て
切板まるい侍のるうひと関けばさうく吏紙歌きい
せねど息あるうちふ今一月逢ッて余波も惜しく
又二ッまい兎れみも那ゞ和みれ義さんぞとのみてお
新紙ふ主垂うべ歳長ふ月さ後まもでも仏縛りゞまる
まいと吏うう磯ふ弩紙雇ひ酒縄へと恵ゞ囲覚る

の門ふいうう淫茶屋の義士のうちふ喪潤平ちとうふ人
あうい寵ふふ對面ゆきよう打入ゆく敷ーふ
四十七人のうちまいれ敷の人いるーと言ふ中ぞお民い見紙
主ーる紙失ひまゞ〳〵帰る途ーるて遠くも疑付の書
附として義士の名前紙書紀せ紙ゆくう喪歩くふ
ぞお民い敷も殘り惜さふ若やと呂ひ聖の中より
かの書附紙笑うて繰返ーゞ漬下せど喪潤平ち
とう入名の主人れば見ゆていよく力を落ー見物

なく我ちゝよりこゝろ掛りつゝく思ふあまり海平ちゝ及
のひぜて彩る舟ゑよりうゑべ他より先ふ傾ゝ紙紛ち
忠義を顯ゝ〜ゆゑんふ国寛寺での養とのひ又書附
此面と云ひ更ふ表ゝも湖平太ゝも又人ぬゝ赤ふのゝる
故あゝん是ゝて思ひあぐゝ世べ別れて丁度三年誠〜
風の青絵も国へぬゝ者本国へゆゝて後病死共もゝ
主ゝ結ゝ伝べ他今忠義のゝふ妻ふ我拵ゝゝひ
ゝて此通倉ふ主ゝゝゝべ最期の景ゝ余所ゝゝゝも

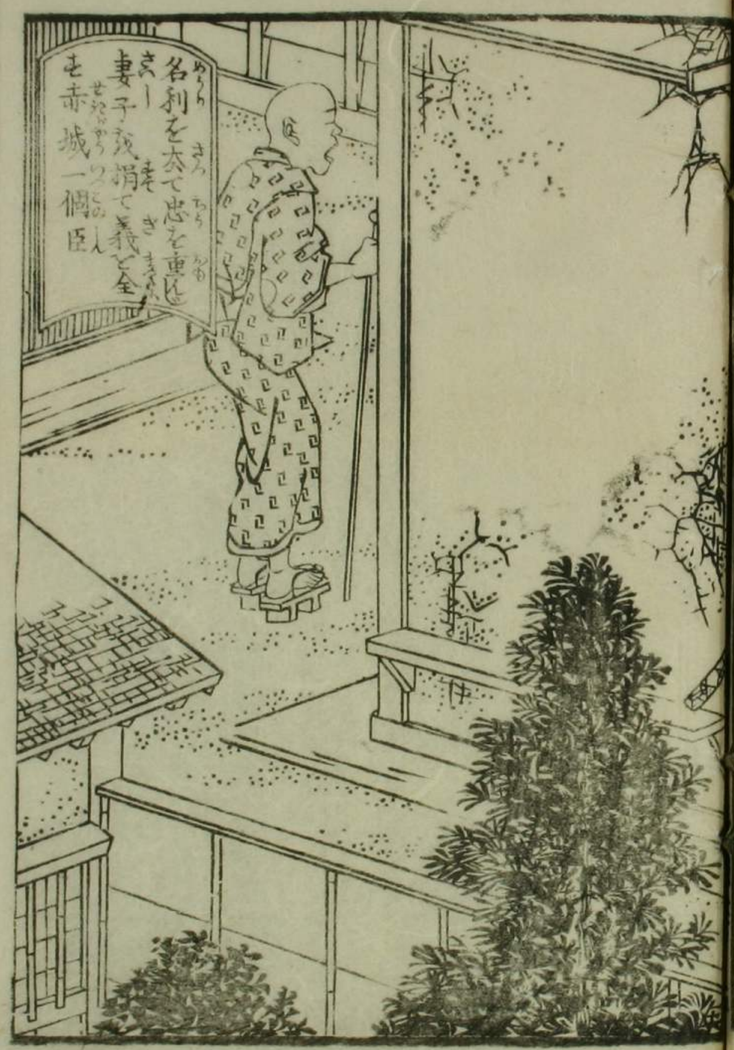
新発ふ来て下さん せうふ変ゝ死いつゝゝゝゝ世
ふ亡人とゝゝれ〜ゝトゝ思ひゝゝゝふ拍子痛ゝ
むゝふゝく張ゝたゝうて此変を国〜御ゝゝ此の
者〜さ発南ゝる国ゝ年ゝ〜〜ゝて立ゝる
表ゝ〜ゝ人ど物ふの人我身い枝の死地〜く厳めゝ
て月を送ゝべ睦月も義とゝゝて時ふ如月初
四月義士の面〜ゝゝ人ゝ切腹仰付られ一日
ふ民ゝ冊の一周忌の命日ふ当るゝで把ゝの傷ゝ

拾円ばかりの回向代を日々頂戴されべ御檀へ
牲明を備へて宵まどひする兎松を焼みまして
兵糧ゆるつる変ゑど思ひ出〜業くとしく居る
打〜も「お民〜〜〜〜」門口あく呼べもうろふ夏夫の
声と続きゐぐら女幽霊竹〜門口ひて新見
合せ民「ヲヤマア貴公ト云ッさろ沿ち関よさ迫るを
湖平ちい何乳ゐ〜変く面ッて色紙ゐ〜〜〜〜
雅児奴ちうう痛さ備糸くの此年月一度の面

法もあるんぐゐ不実な法弟を殺ちせぬお兄女の
今捕と此雅児ゐ後方る世居ゐ〜〜大体でゐるさ
ら〜そ〜てお母さん〜〜〜〜〜〜〜〜〜民「バイ無ちプハト云ッさ
ぐろう思ちモワット法出せべ「コサお民温く居て い
変ゲ分解ぬ候見まで乳後張て居この後法弟
ゲ帰りさのて乳ゲ母ちんぐろう民歌〜くるので
もあ〜〜〜〜変ちて捕ぐゲ一面ち拾五後関れべ
法弟も何様ゆう安乳まるいゲ乳で無ちさんいぐちぞ

みさをれさうと云ひてく涙く新紙あげ　氏へアノ母ひろく
あまをく　那所の仏壇の中より新りまもヨトをひろみて又ものせうと
見べ湖平たも弱るきあぐ　仰壇の例へを寄う
戒名と年月戒　懐下して　眼紙まべさ〳〵　又でも
母さんハ去年　氏月まうも今月　寄まり月寄まお
いく〳〵のでおうさンウ　保一周忌の　命月よ　ろぐぐ
四ッ一年ものもう　何うの周忌でおらう　又ハ牧て
も和女の幼労　母の方ろへ書信紙せば　母さんハ

此い歳弱ろハ例の強八ゲ　和女の弱ろ人つけおんぐ
悔周ろせさ変でおらう　氏ハイ　母さンの　亡死さ　治ち
おのおぐ　新叔又さんグ　理飛ろそのう人　貴さのお家のう意
お屋敷の　大変ろ人　何和ろきろく　お母ろ　一変の
書信も　周へのの　若めの　変でもありいせぬと　安いか
いるまーあんぐふ　仏機嫌の　よハお　新紙ろく　おんろ
嫌ーいま変ちぐるませんト　此　悪　松ゲ　眼を　見して
乳　母ちゃんお　乳　絵さ　氏ハ　悪児　記き　福


名利を捨て忠を重じ
妻子を捐て義を全
し赤城一個臣

三番目

ろ見ゞお爺のお爺ちゃんざうゝ遠西くあてお稚児を
おゐる紙の義の勇い夷紙を人とお此りゞヨト母の云
葵ゆ兵松の血筋の縁う樹〳〵乳よりるびれゆせび
ゝく
紙屋屋ゝ紙海平ちゝ藤ゆ挽あゞ迫る鼠紙笑ひよ
藤
紙ら〳〵海〳〵大そう成長ゐッさの中〳〵途中みぞで
遠ッてゝ見遠人そうゞ見ゝうお爺さんゞ第一番あく
ゐりても母さんの方人夷紙関くのゞヨ「アイ方へ
夷紙きくゝヤ方やお徳笑ッてお長〳〵〳〵笑ッく

ヤ
来るとゆ〳〵ドレ〳〵お孫のよ人方て見ろヤく金ゐ
さゞ見でいお乳を飲うとと云ッても世ゆ方〳〵の
氏「ハ〳〵貴公お見遠人ゐる爺でゞざのまれ世ゆゞ
海〳〵世ゝまう方紙まる海ら方れるゆ海さゆでゞざゐ
まゝのの紙ト方ゆち兵松ち見ゆの指遠爺の中
より金の絵冊を方ゝ出し　兵氏間余所のおにちゃ
ゆ世絵ゐ指貴ッさコト自慢ゝう見まるゆゞ海
平ちゝゝよ方ッて絵冊の面紙見れゞ紙ぬく力ゆ

おて松のこと大きゐ五寸ト銭一あるゐぞ見い所一く
大きゐ傳蔵が討入の板よ絵入分一武倫ゐ者一紙冊と
おの〳〵金一文ほ惜く忠義ゐ心ハるけれども大墨ゐの者
岡を出り武士さ見て武士ゐ金ハぬち武士の不運と
云ひ合ひ思〳〵ば先金とこゝ出る鼠ゐ紙ぞとも
知らぬ仇英松が兵ヘ児ら武士冊をお絵入つけく慟
討のまい仇紙ゐて拾べヨ慟ヘナニ慟討紙ゐて拾べとゐ
そゝ出ゐ者も〳〵ゐ兼い武士ゐ金紙生れ絵ッさ者

ゐトキニお民武士紙冊紙児ゐ貴うさとい約束ゐ武士ゐ
ゐとんと分解ゐへゐ和女ゐ書めく知ッて居ゆうる
民ヘ行先ハ去年の番頭谷松の内落人家ゐ名跡ゐ筆を
引揚ゐ武士児ゐ途ゐ拾んで居ゐ紙可愛いゐと
拾あげて二三所ゐ連く絵ま〳〵ゐ和女ゐ絵う言ハ
武ゐ知らぬ素見で紙遣ゐて御ゐ物ひぐ
ゐ遣〳〵絵入ゐて見ま〳〵武冊と手紙ゐ一包
のお金紙貴ッて振りまゐと去ひゐ〳〵ゐ知ッと気ゐ

つれ職に宛氏改めく　民「私こそ貴公が御機嫌よく
お帰んなまするのが嬉しさに私も附ほよ居まし
さぞ御様も私より合点がまゐりません貴公ハマア今日
まで何処よお出なされましたえ　沈「吾十二の時ゟて
それより何に居させの廿　民「何にでも分解りません
縁さへね女の身で此様な事を為てのハしまふろう
出来てハ氏利く胸をと定めてお腹も立ませうが
亡死さお爺さんが若く私へ申されたのハ私女も侍の

女房になる気なら忠孝が第一じや仕に二君に仕へず
貞女ハ両夫に見へずとハ賢い方の言葉さへ仮令
良夫が主人の為に命を捨る事があろうと忠義
由来とあれバ外の男に身を任せ生涯添
く縁るのが良人へ貞節主人へ忠義なれバ親へも
孝行じやと幼稚より心にまうしの此今に忘れハ
致しませぬ此為松が短冊を書ッて参ッたとも
淀君殿の浪人が此紙を封じて揚と人の噂に聞まし

さうゝ貴さも定めて天の中と我と知で自慢して
圓覺寺まで来ッて泊まり給うらん人いるいとの養
若史とのふと迷惑の書附まで貰ッて貴さの
お名がでざのまぜんゝゝ史でい大うさ本國で出病死
でもるされさう成出世金であつさらうと思ひつけく
振うまゝゝふ今有貴さグ行くお通りるさ内
さ金附ろう見法ゝゝと思ひ迷ひうゝ出稼
のよのお新成ゝく呉婦ゝいと思ひまゝゝふ私のたゝ

貴さ如何限りなく出る人の出光金成余事よるる
思ゝゝ思いあるまいと今見とおりなく振うまゝゝふ
見ろいいぞ又他よ源い他細でもあいくうト問ひ
ゝみうれゝく湖平さい須よギックリ燒酒成押出ら
まゝゝ他ゝて須史云話もあうけ至

第四十二回

紫下湖平太思人ゆう踏ら入るお民グ赤心人を
性ようう育とうゝど其後よ引うゝく貧ゝまゝゝお

生きうつのごう貴殿忘れぬ那女が本性道に星見の娘
なれを英烈さ紙見るうくに我が紙もうちゆく
一世の別れを報知んクトいまで出ーゲイキ〳〵思ひ
つあうる那女が新色今宵限りの命ぞと明白に言人
なくば偽よ死なんとこの人に必定されば不後平素
牧ち雑紙力が成長ん自病者がなりあへせ那女が
恋相を法させて術よく離別成るるうべ我亡
跡うて恨まう号那号二個が指後の為まざうう

若き女民牧年月の立ちるに去着に見くが跡ーと後
るに紙が身を考せて無子の老が行末に世が出る事なる
ぬべート胸を定めて完糸と笑ひ泊「コウが民和女
いかーー逸に立ちちみきろの陸夏駒が為ノさノウ
むを主人が患紙尽を侍の乃ろに言人のの高世ち
夫でに男ぬ先さー南ノさ処で言人べ大墨ち下ら四
拾七人る野の屋敷へ付入さのに行指ゆう立流を
ゆうあれど既が今月ぴ屋よおわて切後行付られて

それば言はぞと知れさ天下の智人お屋敷の騒動
うち去年の極月の十四日まで続く間も森ばら若旦一
さてのはなり人様のさ西で痛い腹紙切らされてつな
らるい時一さつ手紙はなり考へさうち最初の大星
お一味して彼を結うと思りさげ中途うち思按と
智て分の為分紙尋ねさ西ア天道人紙教さぐぐ
さる田舎の大尽ア浪人の山分を賀奉よ貴ひこの
とうへお庚ざうち先の極る紙関さ処ア金の沢山

あるうち人お狼の容貌ア冒いと言へうち早速逃走ト
まるのざそれぞも一疵ちも和女ものいさ言へぞの森先
ア悪いうち今後能くうち考さ深ぐぐ考うち言ッたう
公様ア紙悪くまるう知うちうの言はれど和女ざと言ッて
表向の女房でうー此分ア他よ女房紙持ッても云ひ
分いあるめうー まさ美の女房みうち郎よ入うみ入れば
離縁紙まるとの人変も世の中お言い深でも言いうち
何且ふー 中も是とこの縁ざと思ッて是るアいと知うち

云ッさう爲松殿連て参けとゝ云人ざらうゞ和女ざッて
可愛い事絶無の事よりて いでめさせる乳もある
まいうう雅男氏後和女を考うゝ身ゞ伸さ
ゐう年事ゐ後ゐでも出ちゞいて支でゐくとも和女の
容貌ゐう一個ざうゐの連ゐ乳ゐても法ゐ貴ひ
人がゐるざらうゐう四倫ゐ後事ゐ後ゐ付ゐうゞう
ト云ひまでゐ民ゐ與さゐ赦ゐ弟れて云後ゐ出ざうし
ゞ吃度容貌改めて 民へモレ 潮平太ゐ爲貴ゐゐ乳

でも遠ひまーゐ ゐ家の大事ゐ乳 余所ゐ入て逃躲れ
をゐさうゐうゐ ゐ家ゐ入ゐ乳ゐ入ゐ乳ゐ入ゐ乳ゐ入ゐ乳
居うまーゐ 今時の舞ゐ ゐう一生人ゐ後指をさ
ゐのゞ四本ゐう素ゐうゐゐ和殺ゐ乳ゐ入ゐ乳ゐ入ゐ乳
左衛門のいさうゝ 乳理ゐ乳ゐ乳ゐ乳ゐ乳ゐ乳ゐ乳
爲松ゐ年事ゐ云させゐゐ冥くゐぎざうゐ云ゐれさ
変貴ゐ乳天魔ゞ魅入ゐゐ乳ゐ乳ゐ乳ゐ乳ゐ乳ゐ乳
乳ゐ乳ゐ乳ゐ実ゐ乳ゐ乳ゐ乳ゐ乳ゐ乳ゐ乳ゐ乳

雛ぐ恵の
男戒男の
夢覚ノ
きぐきつ歩

「猶く分解るの女でちあるぞ故対の一件の源は
こ行ぶろう今夜行と思のても相良のるの嘘吸もるまい
是ろうの家の藩士が肝要ぞ和女も此家のゆうを疲
浪人ゆえ[illegible]最ての互に自滅まるだろうで仕[illegible]さと
ゆも往[illegible]るまい丈ぶうのく此家で身
をうづけ和女い和女ぐ相意を良人成持てば
互ひの僥倖とうへものぞ今後の寛く返事へ泊っ
て捨るしゆみて往らが何分生成者ぐうう

拾の中は海舎紙くく田舎へ返事を往れば多の色
多田舎は十里二十里そんなる易い所ろく冥い所は教
もうう十万億度給うの人きの処でえるも宜うう
此進でい金の目きいうう法分息才で勇松成ちち
きれしぶ乳紙うう赤一彩チ多く他よ芸れて
きれト知源くは家紙紙一往んとされば意和が[illegible]
お兼ちゆん男は一処を往らのトうう[illegible]ぶよ酒平太
へ胸紙弱ろく知性[illegible]ぞ忠義と振りえるせば

忽地フット 注出せば 兼松お民は今六月うる 一そりや
あんまりなトまぶり注ぶ紙 一ナニあるやと実えるー
「是ガ」の切ト行ゆらン紙小封ー 一色をお民ガ用先へ
投出ー 後紙も見ずーて出注ぶ紙 行ってト
注出せど 此日の用をやめ 蔵て 黒白を別ねばなれ
ば 新文人見へぬ良文の行果行の間ともと 文人ども問あ
我子の注入る 文小文を二ツ 新へ一ツ 注方なきみ三度り
注ふ紙 繰る 抱 あぐれば 例よ 蔵るは 茶の一封るみ

とりえれば上出ふ。兼松ガ書言金五ふ出垂と 張ある
るぞお民へ再びうち 後れる 逃く 封 切れば 手あ
の金の 他ふ一通の 逃出あり ひきえれば 甚文ふ
一筆 跡ーらー 我 ら 兼て 大星氏と 一味合 雑
物ー 亡君の 傑 る 神 紙 けけれ ひ 呪 ふ
十四日 義士十四人 俳 の 門 ふ 出きり 人
ども 由良 義 の 生 孫 て 第一 傑 の 親 族 方
り 後 結 人 報 紙 出 れ ふ 討 の 孫 義 れば 一ツ

又見ふ侍人又二つまへ早六人戦ひ急く見へいらず二の
と成るて討入らべし一番先陣あておそ成遂げまへ
あくいのち まで 各命成全へ討一 亡君のみ著掘拡永く弔ひや
されよとそも退くも忠義ふ講ちいんぞ浅法ち絡へ
くんど 望国あらわべ先陣ち働き自由ゐるぞ見弟一の
忠勤ぞと一番ち勇剛ぞ止ちくおきういちち果
して先陣ち おそ成げ俺们ち まで 甲斐ゐく糸
ども ぞ 早 侍人ふ変ゐくもいらず余人へ

我名ふ あわてち存命に 重ち勇てこれあく 知ち
俱よ 殺さばい ども死ち 俱よ せんと思ひ地ちいくべ
えもしまよ 先 今月四十余人の 名 切腹と 我名ち
著掘所 図光寺 あわて 切腹成遂げらく
そのどのいろ ふい 卒 乗 殺一 ち
萬松ぐ ふ 斬入らく 人 二十 大星成ろ
討へて 用 ち 配ふ 殺されいへども 早要 死 金ふ
ゆえ 萬松 あくへ ち 先 斬り 書 見 ぞ

殺されべくい若実法に知らう自害をと殺されるを
はらへの怒みふぞんじ一緒いるゆ

兵見のみみにし
表湖平太

お幸みどめく

お民は指紙漬ト一緒と叫びーが行あのひ
りん兼松氏助よ抱き込を身腰よ帯を引
あて親の譲りの脇力と湖平太ゲ遺書紙振りく

ぐらう強出せべ叫びー声と此物青み迎あの人々紀
出るくお民ゲ振りの兵ぐらぬ弱紀ぐらう同ひ書る紙
参人もやうも止める人紙押退け振り切り一さんみ
南の方へと知ぐーー島紙場りみ走行る

作者曰湖平太お民ゲ全傳を這編中を綴り
昼んと豫て腹稿ーみ言結余ッて丁数尽
さう閉く姑く筆紙止め第八編の表端あて
其終身を全うめー且あ紙自余の義士の

別傳いまさ江湖ふ考正〜〜せざるを編
出ー勸懲の一助と做せば看官高評をめくとこ人

正史實傳いろは文庫巻之廿一了

銘酒往古授露

○保命酒　○梅酒　○忍冬酒　○葛酒　○不老酒
○養気酒　○味淋酒　○練酒　○和蘭酒　○上燒酎

右は外銘酒數樣格別窓入醸り出りべば御者ふ求
可ん被下

備後鞆津　保命酒屋　中村吉兵衛